ぼくのゴーサイン

山脇あさ子・さく　二俣英五郎・え

大日本の創作どうわ　大日

NDC.913
ぼくのゴーサイン
山脇あさ子
大日本図書　1983（昭58）
110p, 22cm（A 5）
（大日本の創作どうわ）

大日本の創作どうわ

1983年6月25日　第1刷発行

著者
山脇あさ子

画家
二俣英五郎

発行者
佐久間裕三

印刷／金羊社
製本／岸田製本

発行所
大日本図書株式会社
東京都中央区銀座1丁目9番10号
電話・03-561-8671
振替・東京 9-219番

ぼくのゴーサイン

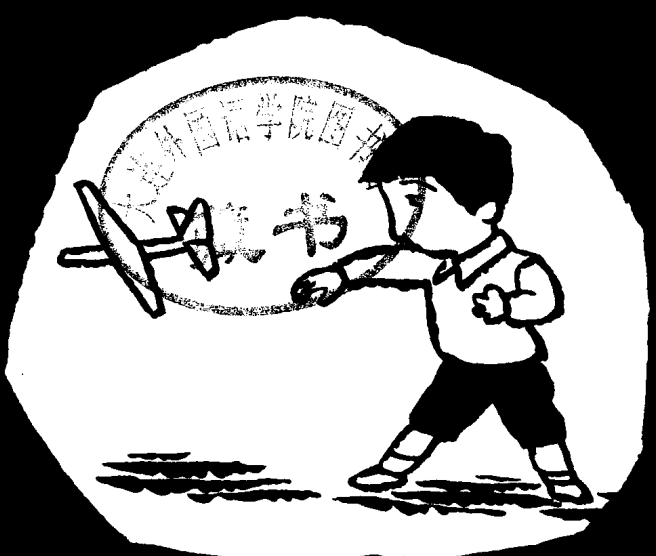
©1983 A. Yamawaki & E. Futamata
Printed in Japan

104647

日文 701671065

ぼくのゴーサイン

山脇あさ子・さく
二俣英五郎・え



大日本の創作どうわ　大日本図書

198703

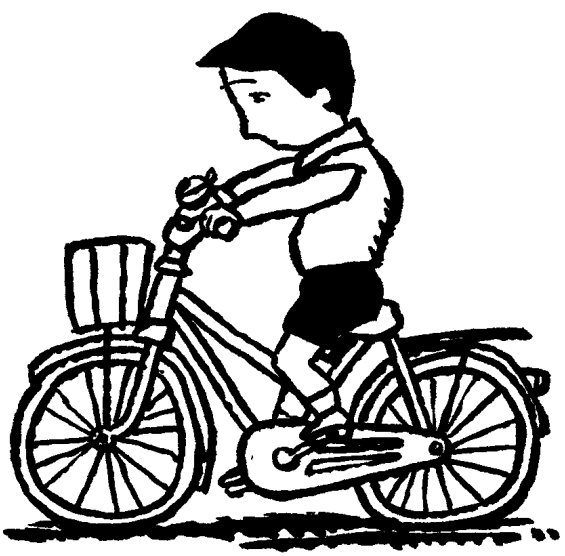
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

❋この本をかいた人❋

山脇あさ子（やまわき　あさこ）
京都府綾部市に生まれる。お茶の水女子大学理学部卒業。1973年ごろから，児童文学作品を書きはじめ，安藤美紀夫に師事。著書に『炎の中のコンテスト』(新日本出版社)『まわれ地球ぎ』(岩崎書店)がある。児童文学創作の研究会「ジャングルジム」同人。日本児童文学者協会会員。

二俣英五郎（ふたまた　えいごろう）
1932年北海道小樽市に生まれる。『いたずらかわうそ』『けんぼうは1年生』『とりかえっこ』(1978年絵本にっぽん賞)(以上ポプラ社)『こぎつねコンとこだぬきポン』(童心社)などの絵本のほか，さし絵の仕事が多数ある。

ぼくのゴーサイン



1　死の消える日

杉沢映は、駅のショッピングセンターの本屋にはいった。

はいってすぐ右手のマンガコーナーは、いつものようにこんでいた。学習塾のかばんをさげた小学生や、制服すがたの中学生たちが、せまいところにかたまって、マンガに読みふけっている。

映はそこへわってはいり、少年コミックという本を手にとった。ぱらりとひらいたページで、

〝死ネーッ〟

かみをふりみだした少年がさけんでいた。映は、うっとのどをつまらせ、ぱたん

と本をとじた。となりにいた中学生が、まゆをしかめ、映をにらんだ。映はそそくさとマンガ本をたなにもどした。

（ちくしょう。死ねだなんて）

心の中でせいいっぱいのもんくをつけながら、マンガコーナーをはなれた。

子どもの本のたなへまわると、

〝死の国からのメッセージ〟

〝決死のレーサー〟

〝死神はおどる〟

〝じっちゃん、死んだ〟

びっしりならんだ本の背文字の中から、死という字ばかりが、映の目にとびこんできた。

（やめろ）

映はぶるんと頭をふった。長めのおかっぱ頭のかみの毛が、さらさらうごいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

映は八日後に、心臓の手術をうけることになっている。あさってには入院する。

映の心臓には小さなあながあいているという。生まれつきのもので、いたくてつらいとか、発作で苦しむとかいうことはない。けれども、はげしい運動はできないし、どうしても病気になりやすい。からだの成長もおくれてしまう。手術をすればなおるけれど、すこし大きくなってからといわれ、それまで、三か月に一度の定期検診を、東京のW大学病院でうけてきていた。十歳になって、やっと手術をすることになった。

手術がきまったとたん、映はこわくなってしまった。

「だいじょうぶ。ごくやさしい手術だよ。きみの病気はかるいものだ。きみとおなじ手術は、ぜんぶ成功しているよ。」

主治医の石井先生は、何度もいってくれた。

(けれど、もしも、もしも失敗したらどうなるの。ぼくは死ぬかもしれない。いや

だ！）

映は手術からにげだしたくなる。

死ぬとどうなるか、映はかんがえる。

ぼくのお父さんは死んだ。まず、そのことをかんがえる。映が二歳のとき、病気で死んだ。映は、お父さんのことはなにもおぼえていない。映のお父さんは、仏だんの中にある、黒光りのする小さな位はいと、仏だんの上、天井ちかくにかざられた、写真の中の男の人だ。

お母さんは、よく、写真のお父さんにむかってはなしかける。

「お父さん、映の手術がきまりました。」

映の手術がきまったときも、お母さんは、まっさきに、写真のお父さんに知らせた。

「わたしのクラスの山上くんが、万引をやってしまってね。」

中学校の先生をしているお母さんは、受け持ちの生徒のことで、思いあぐねたときも、写真のお父さんにそうだんする。お父さんも生きているときは、中学校の先生だった。

そうだんしても、お父さんはなにもこたえない。お母さんは、ひとりでしゃべって、ひとりでこたえている。

「お父さんなんてどこにもいないんだ。へんじなんかしてくれるわけがない。死んだ人が、なにかをかんがえたり、思ったりするなんてことはないんだ。」

映はひとりごとをいっているお母さんのせなかに、そういってみる。そして、死ぬってことは消えることだ、と思う。

ぼくが死ねば、ぼくのからだはなくなる。家の中からも、学校の四年一組のクラスからも、ぼくは消えてしまう。

それだけではない。

からだがなくなれば、頭もなくなる。心もなくなる。

ぼくがいまかんがえていることも、思っていることも、なにもかもぜんぶ消えてしまう。

（いやだ）

映はもう一度、頭をぶるんとふって、たなにならんだ死の字からにげるように本屋を出た。出たとたん、

〝死の消える日〟

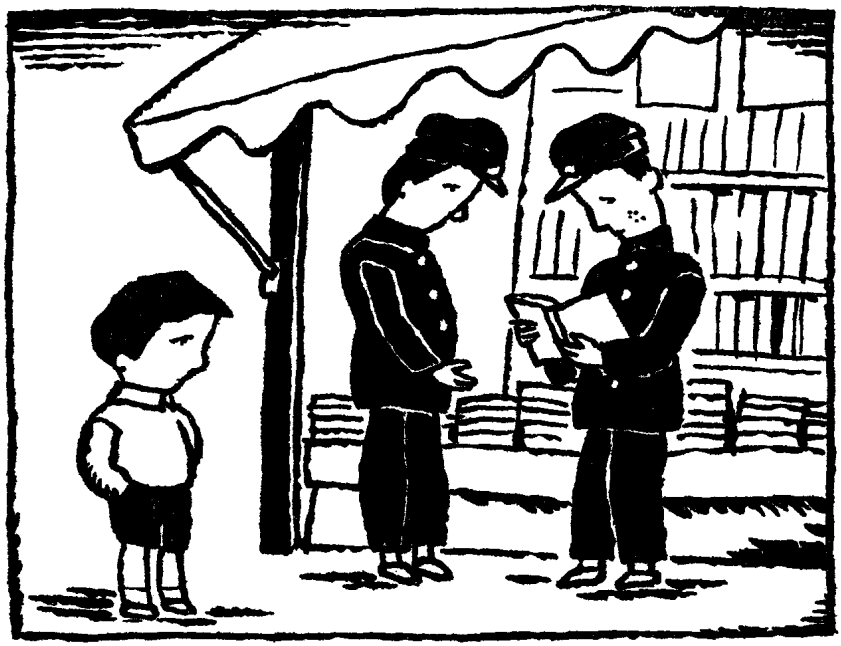
という文字が、目にとびこんできた。映はどきっとして、その場に立ちすくんだ。

ぐっとつばをのみこんでよく見ると、それは本の題だった。

赤と黒のどぎつい色のカバーの本で、店先の台に、なんさつもつみかさねてあった。

ここは、よく売れる本がまとめておいてあるところだ。

「死が消える。消えることが消える。」



映が口の中でぶつぶついっていると、
「あっ、これだ。」
中学生の男の子がふたりきて、その本をとりあげた。ふたりともいきをはずませている。
「これかあ、よし買うよ。」
「ぼくにも読ませてくれよな。」
男の子たちは、本をもって店へはいった。映のまえをとおるとき、中学生のかたにかけた白いズックのかばんが、映にぶつかった。ぽかんとしてふたりを見ていた映は、あわてて、足に力を入れた。そして、手をのばして本をとった。表紙

をよく見ると、

〝死の消える日――アルファ星人のひみつ――〟とあった。

映は読んでみたくなった。死が消えるってどういうことか知りたかった。それに、中学生があんなに熱心にさがしていたんだもの、きっとおもしろい本なんだと思った。

ページをひらいてみると、字が小さくて、ちょっと読みにくそうだった。でも、漢字にはかながふってある。映はこの本がほしくなった。

そのとき、映は、なにをしにこの本屋へきたのか思い出した。映は、入院中に読む本を買いにきたのだった。店にはいったとたん、〝死〟の字においかけられて、本を買うのもわすれて帰ってしまうところだった。

（ばかみたい）

映は首をすくめ、ちょっ、と舌をならした。そして、〝死の消える日〟の本をかかえて、店の中へひきかえした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com